

談話室

北見赤十字病院(日赤)について学んだり意見交換したりする「北見赤十字病院の明日を考え支援する会」が発足した。その代表を務める。病院内の見学会や患者の立場から提言することを目指す。「規模は小さくても、市民や患者の立場から日赤を応援したい」と話している。

■医師のおかげで元気■

11歳のとき、当時はまだ死の危険もあった結核にかかった経験が忘れられない。半年間、週に2、3回ほど学校帰りなどに日赤に通院。この病気のため一時目が見えなくなったりときは母の押しりやカーで連れて行かれたこともあった。「医師のおかげで元気でいられるという感謝の気持ちを深く持った」と話す。

市民有志で「北見赤十字病院の明日を考え支援する会」を発足させた

谷川 勝男さん(68)



「規模は小さくても患者の立場から日赤を応援したい」と話す谷川勝男さん

患者の思い伝えたい

その後、北見などの中学校で教員として約40年勤務し、熱心さから金八先生とあだ名がついたことも。「いじめには向き合い、事実を知る」がモットーで、担当する学年に兆候が見えたときは徹底的に

話し合う。また、受け持ったクラスの40人一人一人について学校での行動や長所を文章にし「四十士小伝」と題して配ったこともあった。今は北見工天生を下宿させる学生寮を経営している。

昨年10月に鼻の病気で入院したときには同じ病室の患者と日赤の役割などを議論をした。地域住民の命にとって重要な存在という思いが募り、「日赤の問題は人ごとだとは思えない。住民自ら動くこと

が大切」と話す。退院後、知人30人に声をかけた。教員時代に人間関係の悩みなどを聞いた昔の教え子も声をかけ合っ

て駆けつけた。そうして集まった8人が発起人となり昨年12月に会をスタートさせた。

■月1回の会合を予定■

第1回会合では、患者や市民約20人が参加し、日赤の職員から病院について説明を受けた。その後の意見交換では、若い入院経験者から「一緒にやりたい」という声もでた。「今まで診療を受けていたが、自分が何も知らないことに気づいた。中核病院としての役割や仕組み、財政状況など、まず勉強したい」と話す。月1回のペースで会合を持つことを予定している。

日赤改築への支援をめぐる北見市政は揺れている。「改築計画には賛同するが政治的な動きには直接かわからない方針。患者の思いを日赤に伝えていきたい」と話す。

(長谷川裕紀)